

インマヌエル

一神が我らとともにおられる一

奨励	勝又 悦子【かつまた・えつこ】
奨励者紹介	同志社大学神学部助教
研究テーマ	ラビ・ユダヤ教文献研究、ユダヤ思想

主は重ねてわたしに語られた。
 「この民はゆるやかに流れるシロアの水を拒み
 レツィンとレマルヤの子のゆえにくずおれる。
 それゆえ、見よ、主は大河の激流を
 彼らの上に襲いかからせようとしておられる。
 すなわち、アッシリアの王とそのすべての栄光を。
 激流はどの川床も満たし
 至るところで堤防を越え
 ユダにみなぎり、首に達し、溢れ、押し流す。
 その広げた翼は
 インマヌエルよ、あなたの国土を覆い尽くす。」

諸国の民よ、連合せよ、だがおののけ。
 遠い国々よ、共に耳を傾けよ。
 武装せよ、だが、おののけ。
 武装せよ、だが、おののけ。
 戦略を練るがよい、だが、挫折する。
 決定するがよい、だが、実現することはない。
 神が我らと共におられる（インマヌエル）のだから。

(イザヤ書 8章5-10節)

はじめに

秋学期の統一テーマである「実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」
 (ルカによる福音書17章21節) から連想するに、神の国が、私たちの間にあるということは、その国にある「神」が「私たちとともにある」ということではないかと思いました。そこで、「神が私たちとともにある」をヘブライ語で表したインマヌエルという表現について、私自身のイスラエルでの体験も踏まえて考えてみたいと思います。

私は、ユダヤ教の聖書解釈を専門に研究しており、ユダヤ教の文献を扱いますので、ヘブライ語を使います。ヘブライ語は、学生時代に聖書ヘブライ語から学び始めたのですが、初めて、すくと腑に落ちて理解できた最初の言葉が、実はこのインマヌエルというフレーズなのです。「インマヌエル」「神が我らと共におられる」と、日本語訳の聖書の訳文をそのまま受け取ると、格調の高い響きがあるかもしれませんが。カタカナで「インマヌエル」というのは舌をかみそいで、呪文のようかもしれませんが。しかし、実はこれは、とてもシンプルなヘブライ語なのです。

「イム」とは、「〜とともに」英語でいうところのwithにあたる前置詞で、この前置詞に、「ヌー」という人称を表す接尾辞がついた形が「インマヌー」です。そして「ヌー」というのは、「私たち」という意味ですので、インマヌーでwith us「私たちとともに」という意味になります。そして、エルは「神」です。ですので、直訳すると、「私たちとともに神」ということになります。

この前置詞についている人称接尾辞というのは、ヘブライ語学習のなかの一つの柱として、名詞にも同様の接尾辞がついて、「私たちの」○○というような所有格になります。名詞だけでなく、いろいろな前置詞について、その前置詞の意味合い+人称、例えば、英語でいうならtoにあたるようなヘブライ語の前置詞「レ」につくと、「ラヌー・・私たちに」「ラッハ・・あなたに」「ラハム・・彼らに」、とかそんな意味になります。この人称接尾辞は名詞にも前置詞にも殆ど同じ形です。現代ヘブライ語でも聖書ヘブライ語でも多少の変化はありますが、登場します。ですので、ヘブライ語学習の重要事項です。そのような形で人称接尾辞を学んでいるところに、クリスマスがやってきて「インマヌエル」という表現を目にするようになり、はたと、腑に落ちると言えますか、すくと理解できたのです。と言うより、「そのまんまやん」と思ったわけです。「イム」に人称接尾辞「ヌー」「私たち」がついて、「私たちとともに」、そして「エル」で神、合わせて「私たちとともに神」、ああ、そういうことだったのか、と以後、心に残っているフレーズでもあります。

そして、今回、振り返ってみると、私はイスラエルに留学し、やっとの思いで学位を取得することができたのですが、それを支えてくれたのが、この前置詞「イム」に人称接尾辞がついたひと言だったのです。そんなことを織り交ぜながら、この言葉が意味するところを想像したいと思います。

イザヤ書における

インマヌエル

では、ヘブライ語聖書のなかでこのインマヌエルというフレーズが出てくるイザヤ書8章におけるコンテキストで考えてみましょう。王国時代に預言活動を展開させたイザヤによる言葉です。では王国時代とはどんな時代だったのでしょうか。ダビデ、ソロモンの時代はまだしも、分裂した後のイスラエル王国、ユダ王国、その後の歴史はひどいものです。それらの歴史を王権ごとに記したのが、列王記、歴代誌ですが、よくよく読んでみると、ひどく恥ずかしい歴史の連続なのです。多くの王が、唯一の神に逆らい、異教の神々、風習にまみれてしまいます。各王朝も非常に短命です。にもかかわらず、なぜ、このような歴史記述を残しているのでしょうか。これには、諸説あるかと思いますが、それは、この非常に困難で、迷いやすい世界の中で、人はどう生きるのかということを示しているのではないかと思います。さて、そのようなユダ王国でのイザヤの預言です。

「『この民はゆるやかに流れるシロアの水を拒みレツィンとレマルヤの子のゆえにくずおれる。それゆえ、見よ、主は大河の激流を彼らの上に襲いかからせようとしておられる。すなわち、アッシリアの王とそのすべての栄光を。激流はどの川床も満たし至るところで堤防を越えユダにみなぎり、首に達し、溢れ、押し流す。その広げた翼はインマヌエルよ、あなたの国土を覆い尽くす。』」(イザヤ書8章6-8節)

「この民」とは、南王国ユダと考えられます。レツィンとはダマスコの王、レマルヤの子とはイスラエルの王ベカだと考えられます。「シロアの水」とは、エルサレムに水を運ぶ水路のことでありとされています。それに対置されている「大河の激流」とは大国アッシリアです。「シロアの水を拒む」とは、即ち、エルサレム、自分たちの国のささやかな水路が象徴するヤハウエの神をないがしろにしたということであろうと考えられます。

歴史的な背景としては、水問題をめぐって、祖国の水不足、周辺国の脅威から、ユダ王国が大国アッシリアに庇護を求めたという状況があったと考えられます。つまり、「シロアの水を拒み、レツィンとレマルヤの子ゆえに」とは、ダマスコの王と隣国(もとは同じ民の)イスラエルの王の脅威を怖がったユダ王国が、大国アッシリアに庇護を求めたことが、シロアの水に象徴されるエルサレムの神、ヤハウエの神をないがしろにすることになり、アッシリアのつけいる隙を与えたことになり、大河が水浸しにする如く、アッシリアがユダの民を飲み込もうとする状況になっていることを指すと考えられます。

「広げた翼はインマヌエルよ、あなたの国土を覆い尽くす」というのは、攻撃なのか、庇護なのか、諸説あるようです。いずれにせよ、ユダ王国は、大国に日和ってしまった自らの過ちのために、敵が差し迫るという緊迫の状況におかれています。

「諸国の民よ、連合せよ、だがおののけ。遠い国々よ、共に耳を傾けよ。武装せよ、だが、おののけ。武装せよ、だが、おののけ。戦略を練るがよい、だが、挫折する。決定するがよい、だが、実現することはない。神が我らと共におられる(インマヌエル)のだから。」(イザヤ書8章9-10節)

大国が差し迫った緊迫の状況のなかで、イザヤは、迫り来る敵に対して、「何をしても無駄だ、武装しても、戦略を練っても無駄だ、挫折する」と宣言します。もともと、ユダ王国が大国を頼ったという身から出た鎧でもあるのですが、イザヤは外国勢に対して弾劾します。このような緊迫の状況のなかで、2度にわたって、インマヌエルという言葉が出てきます。

最初は、主からイザヤに対してです。そして、その言葉を受けてかのように、イザヤは大国に対して宣言します。「神が私とともにいる」という宣言は、お前たちは何をしても無駄であるということです。

ここで、注目したいのは、神がどのようにユダを守るのかということについては、具体的には何も語られていないということです。ユダを神が守るであろうということは、「神が私たちとともにある」というそのことだけなのです。この言葉だけです。しかも、このような状況をもたらした原因は、ユダ王国が犯した過ちにあります。にもかかわらず、ユダに対し

て「神が私たちとともにある」というフレーズが繰り返されるのです。

では、この言葉はどんな響きをもって、当事者のユダの民の耳に響いたことでしょうか。

現代ヘブライ語における

イムの語感

そこで、私自身の「イム」（～とともに）という前置詞に関わる体験をお話したいと思います。現代ヘブライ語の状況からみて、「～がともにいる」という表現がもたらすニュアンスを考えてみたいと思います。

私は、イスラエルのエルサレムにあるヘブライ大学に留学しました。ユダヤ教の聖書解釈の第一人者である先生の元で、博士号を取りたいと思っていました。その先生の授業も受けておりました。当時は、大学間の協定もなく、何のつてもなかったため、その先生のオフィス・アワーに訪れて、「学位を取りたいんです。指導教官をお願いします」と頼みにいったわけです。殆ど、飛び込み営業のようなものです。先生は、ポカンとされています。眼の前に、極東からやってきたアジア人の女子学生が、ここで博士号を取りたいと言っている。「何でということ」という面持ちです。それでも、しばらくお話は聞いてくださり、おっしゃいました。「熱意は分かる。でもなぜエルサレムで学位なのか、しかもこの分野で。それは大変な道だ。考え直してこい」となりました。その後、何度かオフィス・アワーに訪ね、指導教官をお願いしました。しかし、首を縦に振ってもらえません。そのうちに学期末を迎え、自分のクラスの試験を受けてみると言われ、試験を受けました。あんまり、よくもなかったのですが、まあ何とか合格点でした。そして、次の面会では、最近出た分厚い博士号論文を2冊渡され、「こういうのが書けるか、よく、よく、考えてこい」と言われました。2冊の論文は、1冊は、あるユダヤ教文献を、写本から比較校訂した非常に詳細な議論でして、「これは、とても無理」と思えるような論考でした。すでに、何度かの面会で、私のやる気も萎えてきており、もう、こんなに受け入れてもらえないのなら、日本に戻って日本語で書いてもいいかなと思えてきました。ただ、もう1冊はラビ・ユダヤ教文献の文学的考察のような感じで、こういう方向だったら、できるかもという気もしました。しかし、心はかなり萎えてきています。その次の面会では、もう先生の顔を直視もできません。先生は再び問います。「論文を読んできたか」「はい」「ああいうのが書けるのか」ちょっと沈黙、そして、2冊目の方だけ思い出して、「あれだったら、はい、書けます、書けます、書きます」と、先生の顔は見ずに言い切るしかありませんでした。先生は続けておっしゃいました。「エルサレムで学位をとるのは、本当に、強く、強くなくてはならないんだ。それができるか、できるか」と問いただされました。ああ、ここまで言われるんだったら、もうやめた方がいいかなと思いはじめました。それでも、口では「はい、はい」と言い続けました。

その瞬間、先生は、「アニ・イタツハ」と言われたのです。

「アニ」とは、「私」です。

「イタツハ」とは、さきほどからお話ししている「～とともに」の「イム」が変化した形です。頭の中で、ゆーっくりと品詞分解です。「(タ)ツハ」となるのは、二人称女性単数「あなた」がついた形です。つまり「私はあなたとともにいる」「I with You」ということです。そして、この場面で女性の「あなた」に当たるのは、私しかいないということは、指導教官引き受けてくださることなのか。そのときの、スローモーションのような頭の中の動きを今でも鮮明に覚えています。

インマヌエルは、冒頭にお話したように、何のこともやらチンプンカンプンの方もいるかもしれません。しかし、「イム」、つまり「ともにいる」に人称接尾辞をつけて、あなたとともにいる、〇〇とともにいる、と変化させた形は、現代ヘブライ語でもよく使う表現なのです。例えば、「どうしたの。元氣？」と聞かぬに、「マ・イタツハWhat with you?」という形で聞くことも日常会話でしばしば見られます。

やっと指導教官になってもらえて安心すると同時に、「イム」は、こんな風に使うんだと納得したりもしておりました。

さて、念願叶ってやっと指導教官になっていただくことができたのですが、想像に難くなく、本当に大変なのはそれからでした。そして、あっという間に10年の月日が流れました。結婚、出産、子育てなどのなかで、もう学位論文は放り出したいと、何度投げ出そうと思ったことでしょうか。夫の都合もあり、論文の完成、提出だけを残して、日本に帰国しました。仕上げなくてはいけないと思いつつ、目の前の日常をこなすだけで日々が過ぎていきます。同志社での嘱託講師の仕事もありました。日々の子育て、あちこち送迎しなくてはならない毎日、小さな論文を書いたり、発表したりで時間が過ぎていきます。そして、ヘブライ大学の事務から最後通牒も言い渡されました。でも書き進められない。日本に帰って来たことだし、放り出して、先生ともこのままなとなく、疎遠になってしまおうか。そんなことが何度も頭をよぎりました。

しかし、その度に、蘇ってきたのが「アニ・イタツハ」なのです。あれだけ先生に、「できるのか。強いのか」と念を押されて、それに対して、イエスを言い続けた、その私の言葉を信じて先生が発してくださった「アニ・イタツハ、私はあなたとともにいる」あの言葉を裏切ることにはできない。そんなことをしたら、一生私は重荷を背負っていくことになるような気がしました。たとえ、イスラエルと日本で遠く離れているにしても、この先生の言葉を裏切ったということに対して、一生イスラエルの方向には、顔向けできないように感じました。「アニ・イタツハ」が本当に、短い、単純なフレーズであるからこそ、いつまでも忘れられずに、余計に重く重くのしかかりました。そして、何度も挫折しそうになりながらも、10年以上の月日をかけて、何とか書き上げ、やっと提出することができました。学位授与式のときに、その先生が、客席から手を振ってくださったことが忘れられません。

このように「イム」が、人称変化した形は、今でもよく使われます。おそらく、私自身の体験からもお分かりいただけるかと思いますが、短いだけに、でもそれだけに重みをもったフレーズなのです。

イザヤ書に戻りましょう。ユダの王国は、さんざん罪を犯してきました。しかし、にもかかわらず、「神は私たちとともにいる」と言われているのです。だからこそ、ズシンと響く言葉であったのではないのでしょうか。では、「神が」ともにいるということは、どういうことなのでしょう。

神がともにいる、とは

ここで、私の友人のお話をさせていただきたいと思います。子どもの幼稚園で親しくなったAさんの話です。別の小学校に入ったので、しばらく連絡が取れませんでした。「また会いましょうね。ご飯食べに行きましょうね」と、時々連絡を入れていたのですが、なかなか返事はきません。ある日、返事がきました。「実は、病気で入院中です。その病気が、血液のがんです」。こちらが倒れ込みそうでした。私よりずっとお若い方です。病気の性質上、死と向き合わなければならないということ。そして、同い年の子供を抱える母親として、彼女の絶望たるや、どんなものか、想像するだけでも、身を切られるような思いがします。治療が一段落したところで、会ってお話しました。

病気が分かる前から、教会に通われていたそうです。ただ、それは、教会の先生に魅かれて、ということで、洗礼を受けることや、深く信仰について考えることはなく、通われていたということでした。そんなとき、この病気が発覚したとのこと。真っ暗な気持ちのなかで、抗ガン剤治療などを受けておられたそうです。その最中のことだったそうです。突然、光が差し込んできた気がして、そして心に浮かんだそうです。「神さまが、ずっとそばにいてくださるなら、どんなことも怖くないはずだ。たとえ死を迎えることになっても、神さまと一緒にいれば、怖くないのだ」と本当に突然、そんな思いが心にわいた、というか、天から降ってきたような気がしたということでした。その瞬間に、洗礼を受けることを決意され、受洗されました。

私は、クリスチャンの家庭に育ち、幼児洗礼も受けておりますが、信仰の強さという点においては、もう彼女の足元にも及ばないと思いました。私自身、さまざまな悩みがあり、いろいろなことが怖くてなりません。しかし、「神さまがそばにいてくださる」ということが、どんなことが、「神様がそばにいてくださる」ことで、どんな恐怖にも絶望にも立ち向かう、受け止める強さが与えられるということなのだとすることを、私自身、彼女の言葉から何か打たれるような気持ちで感じました。

イザヤ書に書かれている状況は、ユダ王国が置かれた戦争の状況ですが、今の私たちにとっての、戦争は、個々人の心の中のさまざまな葛藤・悩み・不安・絶望として考えることができるのではないのでしょうか。そして、そのような絶望、暗闇にあつて、イザヤが発した預言の中身は「インマヌエル」=神が私たちとともにいるという、実にシンプルなフレーズでした。だからこそ、民を支えるものであったのではないのでしょうか。自らの罪にもかかわらず、「神はともにいる」と宣言されたその言葉は、その後のイスラエルの民も含めて、重くのしかかったのではないのでしょうか。あの状況で、あの言葉を発してくれた神だからこそ、裏切るわけにはいかない、という思いがその後のイスラエルの民を支えることになったのではないのでしょうか。そして、Aさんが体験されたように、神が私たちとともにいると感じることが、目の前の試練を受け止め、乗り越えるにあたって、どれだけの力を与えられることなのかがお伺いできるかと思えます。

大学生生活のなかで、また社会に出ても、私たち自身も、さまざまな悩みや苦しみのなかにあるかと思えます。しかし、そのような個々人の闘いのなかで、「神が私たちとともにいる」と非常にシンプルな表現ではありますが、それを感じることで、心の闇や絶望に立ち向かう力を与えてくれるのではないかと、そして、このような形もまた一つの大切な信仰の形と言えるのではないかと思えます。